

特集

動き始めた新医師臨床研修制度

新医師臨床研修制度が実施の段階に入った。先行きが危ぶまれた臨床研修の必修化も、昨年の秋にはほとんどのすべての臨床研修病院と研修医が参加してマッチングが行われ、95%以上の組み合わせが決定するなど終盤になってから急速に準備が進んだ。その結果、臨床研修病院で研修する研修医の割合が、従来の4分の1程度から、4割以上となったことなど、新たな臨床研修制度の趣旨に沿った結果が得られたということができる。

今回の臨床研修制度の改革は、医療の基本的なあり方に大きな変革をもたらすものと考えられるが、医師が養成され、診療活動を行う一連の経歴、すなわちキャリアパスが基本的に変わることが見込まれる。大学病院の医局講座に拠点を置いて関連病院に派遣をされることを繰り返しながら自らの居場所を定めてゆく、従来の医師の一般的な履歴は、今後はどのような流れに変わってゆくのか、新たな医師のキャリアパスを展望しておく必要がある。

新医師臨床研修制度の導入で最も懸念された財源についても170億円余が確保され、その配分の仕方や研修医の手当ての支払われ方にも一定の流れができつつある。しかし、研修医の労働者性の保証や指導医の手当てなど、残された課題は少なくない。マッチング・システムの今後のあり方なども含めて、制度運用側から現段階での見解を知りたいところである。

一方、臨床研修病院においても、研修プログラムの実施の中で、実際の指導と評価をどのように実践してゆくのが問われている。研修の実を上げるための指導医の体制のあり方など、多忙な診療業務の中での効果的な工夫が期待される。また、新制度の導入に先がけて大学病院からの医師派遣が円滑に行われなくなるなど、地域医療への影響が心配されてきたが、制度の運用が開始された現在、地域医療の実情がどのように変わってきているのか、また大学医局との今後の関係はどのように推移するのかなどについて考えてみたい。

医師養成のあり方が大きく変わる中で、多くの病院が今後の医師確保の展望を開くために、様々な取り組みを行っている。必要な医師を確保することが病院の発展の基礎であることはいうまでもないことで、研修医に選択される臨床研修病院になることの意義が強調されている。また、座談会においては、臨床研修に実績を持つ病院だけでなく、これから積極的に臨床研修にかかわろうとする病院まで、今後の病院における医師の確保に関連した諸問題をテーマに語っていただくこととした。（大道 久）